

CAMPUS HEALTH



第 47 号
平成24年11月1日発行
京 都 教 育 大 学
保 健 管 理 セ ン タ ー

「健康」であることを求め続ける風景

社会科学科・土屋雄一郎

テレビコマーシャルや新聞雑誌の広告、量販店の商品棚を見渡すと、私たちの日常のいたるところに、「健康グッズ」が溢れている。ダイエット食品、ヘルスクラブの会員権、ビタミン剤や運動器具の購入など、健康や体力増進に多額の費用を費やしている。空前の健康ブームであるというよりも、私たちの社会、暮らしや意識のなかに、こうした風景は、当たり前なものとして、すっかり溶け込んでしまっていると言った方が適当なのかもしれない。と同時に、一方でそれを害するものの排除が進められている。日本たばこ産業の調査によれば、我が国における喫煙者率は21.7%（2011年）で減少傾向にあるが、健康のためにその割合をさらに下げる必要があるとの指摘も多い。

しかし学生時代、映画のスクリーンの向こう側でスターが煙を燻らせる場面を見てはタバコを口に銜えることは憧れであった。また、それは大人の世界に対する好奇心であり抗いでもあったように思う。父親がヘビースモーカーだったせいも、私自身は、タバコを吸いたいと思わなかったし実際に吸った経験もない。ただ、街角に滲みついた微かなニオイは、なぜか嫌いではなかった。この間に起こった喫煙に対するまなざしの変化は、健康を志向する現代社会の写し鏡であると言っていいたい。

こんにちのポストモダン社会の考察を深めるジークムント・バウマン（2000=2001）は、健康の本質は、体温や血圧のように計測され数値化された基準によって規定され、正常／異常の判断が明確な識別によって定義されるものであったが、無限の可能性を特徴とする現代社会では、健康基準を含むあらゆる基準が激しく揺さぶられ、非実体化しつつあることを指摘する。「健康増進」という言葉が使われ始めたことで、健康の増進に終焉がなくなり、目標が設定されたとしても際限のない努力の一段階を示すに過ぎなくなる。私たちは、「健康にいい」ことを選択し続けなければならないという状態におかれ、健康にこだわるがゆえに、恐怖と不安にとらわれ、用心深く、慎重になり、節制にもこころがけるようになるという。こうした態度が、現在の健康ブームを生み出し、絶え間ない「健康グッズ」の消費を生むとしたら、「健康」に対する害を取り除こうとする行為が、はたして社会の悪霊払いとなりうるだろうか。

もちろん、ここで喫煙を奨励しようなどというつもりはまったくない。

ただ、出張で東京に向かう新幹線の車中、ごく限られた空間の中でタバコに火をつけ一服したあとで、その場を立ち去ろうと背広についたニオイを携帯用の消臭スプレーで処理しているビジネスマンとすれ違ったときにふと思うことがある。それは、「健康グッズ」に取り囲まれた生活スタイルが私たちの暮らしに安寧をもたらすのだろうかという疑問だ。私事になるが、不摂生な生活がたたると、2年前の冬、半月にわたり入院をすることになった。しかし、毎日の血圧、脈拍、体温の測定、水分摂取量と排尿量の計測、心電図をはじめとするさまざまな検査の結果や、食事の配膳台に添えられたカロリー表示など、絶対的な基準に囲まれた生活は、自分が健康であること／ないことの境界をはっきりと確認することができる、その意味で、私にとって安心できる時間であったことは間違いない。

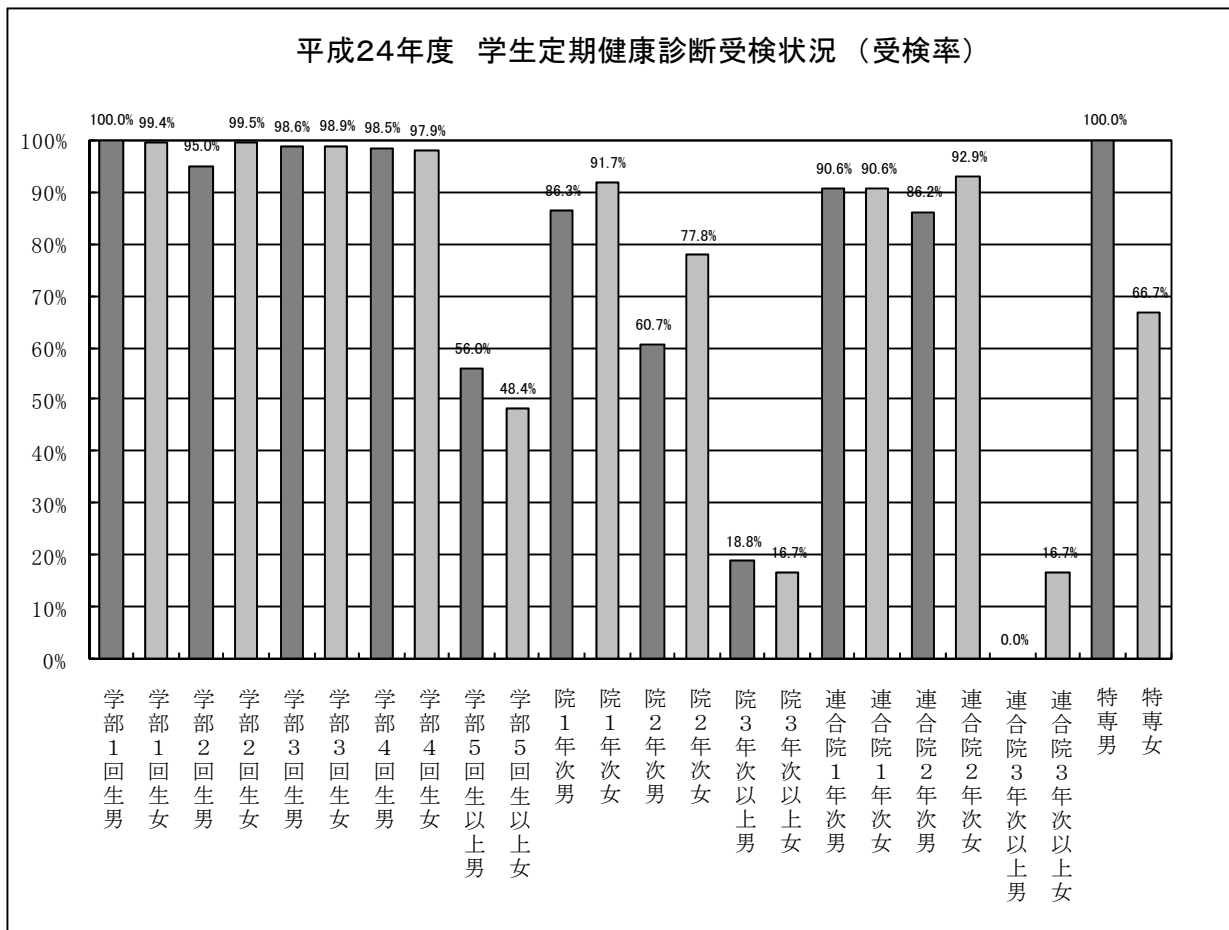
参考文献・参考 URL

Zygmunt Bauman, 2000, *Liquid Modernity*: Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ―液化化する社会―』大月書店)
日本たばこ産業ホームページ http://www.jti.co.jp/investors/press_releases/2011/1125_01/index.html (2012年10月31日閲覧)

平成24年度学生定期健康診断の実施結果

平成24年度学生定期健康診断を4月の2日、3日に実施しました。その受検率は下表のとおりです。

平成25年度は4月2日、3日に実施する予定です。疾病の早期発見や予防、自己の健康管理のためには、定期的な健康診断が必要です。自己の健康管理を行うことは、自分だけではなく、家族をはじめ、まわりの人たちのためにも大切なことですので、必ず受検してください。また、定期健康診断の結果による証明書は、介護等体験実習で福祉施設等を訪問する場合や就職活動などに使用することになります。受検していない場合、再検査の連絡に応じていない場合は、証明書が発行できませんので留意してください。



キャンパスドクターの独り言

**健康であるうちには、健康の価値が分からず、
病気になって初めて、健康のありがたみが身に沁みます。**

公立の総合病院心療内科に勤めていた頃の話です。

30代前半の有名企業の技術職で、3か月前に昇進したのは良かったが、眠れなくなったと新患外来を受診してきました。聞くと、睡眠途中で起きてしまい眠れないとのことで睡眠薬を出してほしいという希望を述べた。診察中に咳き込むので、体調を聞くと、咳き込むことが多いとのことだった。確かにアレルギー性咳や心因性の咳もあるけれども、会社の健診の結果はどうだったのか尋ねると、中国出張があって今年度は受けていないらしかった。念のため血液検査や胸部レントゲン写真をとろうと提案し、検査結果やレントゲン写真の現像が出来てからもう一度診察室へ呼ぶことを伝えた。他の患者さんを診察している間に、診察室の外から小さな女の子の声が聞こえていた。

レントゲン写真は、呼吸器科の専門医でなくてもわかる、胸水がたまっていた。肺癌か結核など重大な病気であることは間違いなかった。呼吸器科への検査入院はベットの都合で翌週の月曜日になった。CT検査や喀痰塗抹検査の結果から癌がもっとも疑われた。

入院検査の必要性を告げるため、10歳年下という若い奥さんと2歳半の長女が診察室に入ってきた。不眠症で受診を勧めたのは奥さんだったが、忙しくて1ヶ月以上受診できなかったことがわかった。ニュースで動物園に、何かの動物の赤ちゃんが生まれたことが話題になっていた日で、入院する前の土日にその長女を連れて行けるといいねという話になった。水族館のペンギンも見に行ければよいということにもなった。

彼は、18歳からタバコを吸い始めた。入院後、肺癌告知を呼吸器科主治医から受け、今になってタバコを吸っていたことを強く後悔していると述べた。わずかは外泊で家に戻れたが、数か月後彼は若い妻と幼い娘を残して旅立っていった。

小さい愛する娘を残して死ななければならぬ無念さは想像に余りある。映画「ゴースト」の主人公のように、この世に残って、娘や妻を見守りたかっただろう。

タバコは、自分の健康だけでなく、愛する人も傷つけてしまうことになった。3歳の誕生日にはお父さんはいなかったのです。お母さんが再婚しても義父から虐待を受けなければよいのですが。今どうして暮しているのでしょうかあの時の女の子。

健康であるうちには、健康の価値が分からず、病気になって初めて、健康のありがたみが身に沁みます。命のありがたみが身に沁みます。